

25年センター試験「基幹3教科」平均点合計(600点満点)

「国語+数学(I・A+II・B)+英語」は、 29.7点ダウンの328.4点(得点率54.7%)!

数学I・A-18.8点、国語-16.9点の大幅ダウン。

数学II・B+4.5点、英語+1.5点のアップ。

「公民」受験激減。「現代社会」受験者20.9%の大幅減。

旺文社 教育情報センター 25年2月

25年センター試験は志願者57万3,344人(前年比3.2%増)、受験者54万3,271人(同3.2%増)で、ともに2年ぶりの増加である。

24年は地理歴史(以下、地歴)と公民の問題冊子の配付ミスなどで多大な混乱を招いたが、25年は問題冊子のパッケージ(ラップ)化など改善を図り、実施上の大きな混乱はなかった。

大学入試センターからこのほど発表された実施結果によると、国公立大の文系・理系に共通の「国語、数学(2科目)、英語」の“基幹3教科”の平均点合計(600点満点)は、24年より29.7点ダウンの328.4点(得点率54.7%)だった。過去のデータも含め、センター試験の実施結果を様々な角度から分析し、以下にビジュアルデータとしてまとめた。

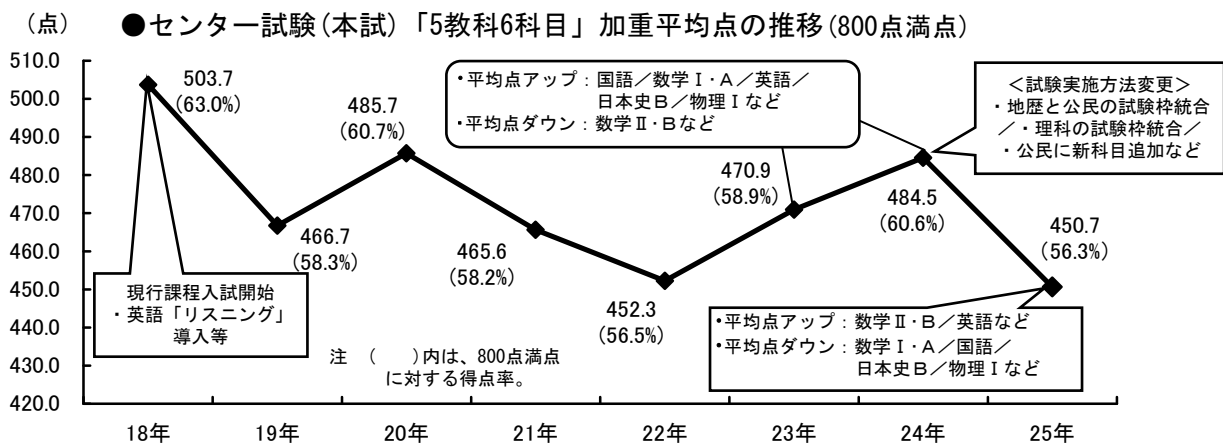
■基幹3教科の平均点

◎ 24年センター試験(以下、セ試)から地歴、公民、理科における試験枠の変更に伴い、各科目の得点には「第1解答」と「第2解答」(後述)の得点が混在し、各科目の平均点の実態が従前に比べ把握しにくい。そのため、平均点の動向をみる一つの視点として、国公立大の文系・理系に共通の“基幹3教科”である国語、数学、英語の平均点合計を算出。

大学入試センターから発表された科目別平均点等の「確定値」を基に算出した“基幹3教科”平均点合計(600点満点)は、次のとおりである。

国語+数学(数学I・A+数学II・B)+英語 = 328.4点(前年差:-29.7点。得点率54.7%)

なお、国公立大受験の動向をみる参考に算出した、文・理系型共通の“5教科6科目”の各加重平均の合計(800点満点)は450.7点(得点率56.3%)で、3年ぶりに低下した。



注. 大学入試センター発表の各科目別平均点と受験者数から算出。国語(200点満点)の平均点、及び地歴と公民を合せて1教科・1科目とした加重平均点(100点満点)、数学①の加重平均点(100点満点)、数学②の加重平均点(100点満点)、理科の加重平均点(100点満点)、外国語の加重平均点(200点満点)を合計(800点満点)。18年は理科の新課程(現行課程)出題に伴う「経過措置」科目(旧課程科目)含む。

平成25年度 大学入試センター試験(本試験) 平均点等一覧[確定]

＜平成25年2月7日 大学入試センター発表＞

教科	科目	平成25年(確定)		平成24年(確定)		平均点 対前年差	受験者数 対前年差	
		受験者数	平均点	受験者数	平均点			
基幹3教科 平均点合計(600点満点) 【国語+数学Ⅰ・A+数学Ⅱ・B+英語(200点換算)】		- (得点率)	328.4 54.7%	- (得点率)	358.0 59.7%	▲ 29.7 (点)	- (人)	
国語(200点)	国語	516,153	101.0	502,525	118.0	▲ 16.9	13,628	
地理歴史・ 公民	地理歴史(100点)	世界史A	1,491	46.7	1,701	43.6	3.1	▲ 210
		世界史B	90,071	62.4	91,139	60.9	1.5	▲ 1,068
		日本史A	2,651	41.6	3,302	48.7	▲ 7.1	▲ 651
		日本史B	159,582	62.1	157,372	67.9	▲ 5.8	2,210
		地理A	2,253	50.1	2,695	47.4	2.7	▲ 442
		地理B	143,233	61.9	132,528	62.2	▲ 0.3	10,705
	公民(100点)	現代社会	83,471	60.5	105,570	52.1	8.4	▲ 22,099
		倫理	36,151	58.8	35,537	69.0	▲ 10.2	614
		政治・経済	51,888	55.5	57,224	58.0	▲ 2.5	▲ 5,336
		倫理、政治・経済	53,295	60.7	49,601	67.1	▲ 6.5	3,694
数学	数学①(100点)	数学Ⅰ	8,135	40.8	7,186	40.2	0.6	949
		数学Ⅰ・数学A	398,447	51.2	384,818	70.0	▲ 18.8	13,629
	数学②(100点)	数学Ⅱ	6,970	26.2	6,917	26.0	0.2	53
		数学Ⅱ・数学B	359,486	55.6	349,438	51.2	4.5	10,048
		工業数理基礎	25	33.4	42	35.6	▲ 2.2	▲ 17
		簿記・会計	1,208	38.4	1,288	45.6	▲ 7.3	▲ 80
情報関係基礎	608	57.3	651	56.9	0.4	▲ 43		
理科(100点)	理科総合A	12,805	44.8	15,270	67.9	▲ 23.2	▲ 2,465	
	理科総合B	17,310	54.4	20,365	60.4	▲ 6.0	▲ 3,055	
	物理Ⅰ	159,644	62.7	152,853	68.0	▲ 5.3	6,791	
	化学Ⅰ	231,945	63.7	223,669	65.1	▲ 1.5	8,276	
	生物Ⅰ	195,815	61.3	189,214	64.0	▲ 2.7	6,601	
	地学Ⅰ	17,853	68.7	18,347	69.5	▲ 0.8	▲ 494	
外国語(200点)	英語	筆記(200点)	535,835	119.2	519,867	124.2	▲ 5.0	15,968
		リスニング(50点)	529,440	31.5	514,748	24.6	6.9	14,692
		筆+リ(200点換算)	-	120.5	-	119.0	1.5	-
	ドイツ語	123	151.5	125	144.1	7.4	▲ 2	
	フランス語	151	150.6	142	131.7	18.9	9	
	中国語	445	159.3	389	154.1	5.2	56	
	韓国語	180	140.3	151	146.4	▲ 6.1	29	

＜注＞

- ① 英語の平均点(200点)は、「筆記」(200点)＋「リスニング」(50点)の250点満点を200点に圧縮換算。
- ② 大学入試センター発表の科目別平均点は小数第2位の表示だが、旺文社では小数第1位で表示。
- ③ 表中の「平均点対前年差」は、四捨五入の関係で「25年-24年」と一致しない場合もある。
▲印は「ダウン」(平均点)、および「減」(受験者数)を示す。
- ④ 地歴(各B科目間)、公民(「倫理、政治・経済」除く、各科目間)、理科(各Ⅰ科目間)における得点調整は、「地学Ⅰ」-「生物Ⅰ」の7.4点差が最大で、実施されなかった。

主な科目の平均点アップ・ダウン & 受験者増・減

＜平均点アップの主な科目＞

現代社会(+8.4点、20.9%減)／数学Ⅱ・B(+4.5点、2.9%増)／英語(+1.5点＜筆記＋リスニング＞：「筆記」-5.0点、「リスニング」+6.9点／「筆記」受験者数3.1%増)／世界史B(+1.5点、1.2%減)など。

＜平均点ダウンの主な科目＞

数学Ⅰ・A(-18.8点、3.5%増)／国語(-16.9点、2.7%増)／倫理(-10.2点、1.7%増)／「倫理、政治・経済」(-6.5点、7.4%増)／日本史B(-5.8点、1.4%増)／物理Ⅰ(-5.3点、4.4%増)／生物Ⅰ(-2.7点、3.5%増)／政治・経済(-2.5点、9.3%減)／化学Ⅰ(-1.5点、3.7%増)／地学Ⅰ(-0.8点、2.7%減)など。

注。()内の前記数値は平均点の対前年差、後記の数値は受験者数の対前年比増減。

■英語;筆記-5.0点、リスニング+6.9点で、「筆記+リスニング」は1.5点アップ!

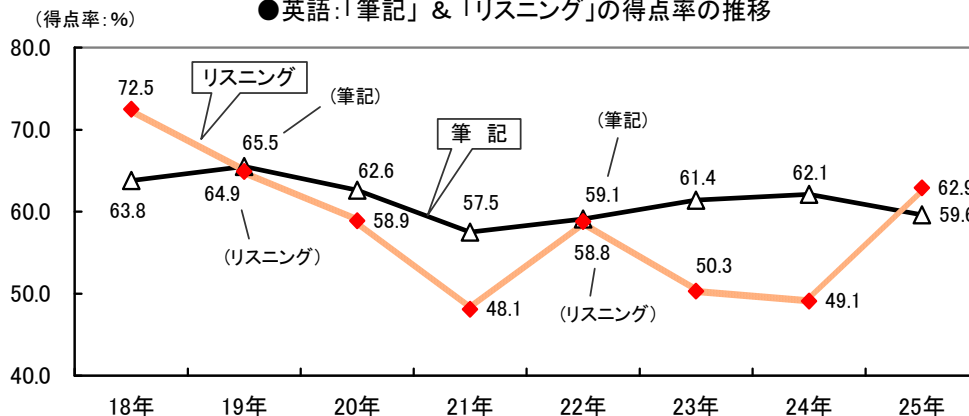
◎ 25年の英語の平均点は筆記が5.0点ダウン、リスニングが6.9点アップし、全体(筆記+リスニング:250点満点を200点満点に圧縮換算)では1.5点アップの120.5点だった。

平成2(1990)年のセ試開始から25年までの英語の平均点(2年~17年までは筆記のみ、18年以降は筆記+リスニング)の推移をみると、6年にこれまで最低の96.4点(得点率48.2%)を記録した後、V字回復を果たし、得点率はほぼ5割台半ば~6割台半ばを推移している。最近では、21年112.2点(得点率56.1%)→22年118.0点(同59.0%)→23年118.4点(同59.2%)→24年119.0点(同59.5%)→25年120.5点(同60.2%)と、上昇傾向にある。

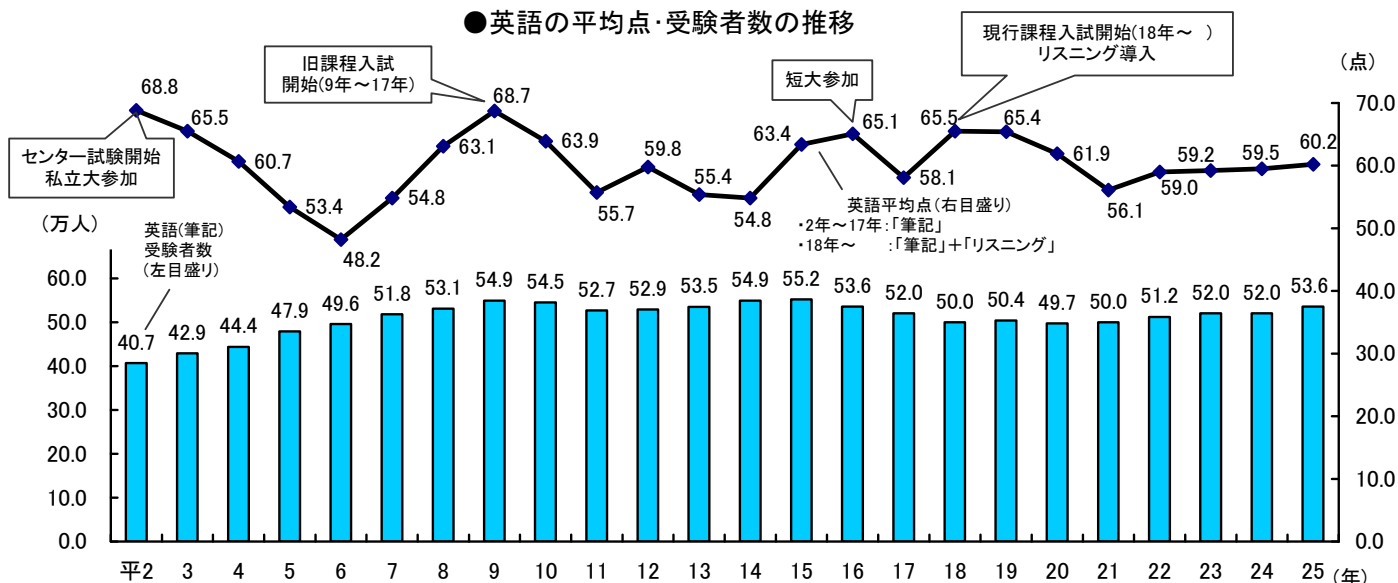
◎ 最近の筆記は、21年に115.0点(200点満点、得点率57.5%)と6割を割った後、22年118.1点(同59.1%)→23年122.8点(同61.4%)→24年124.2点(同62.1%)と、上昇傾向が続いていたが、25年は119.2点(同59.6%)と、4年ぶりにダウンした。

一方、リスニングは、18年の導入時に平均点36.3点(50点満点、得点率72.5%)の高得点を示した後、19年32.5点(同64.9%)→20年29.5点(同58.9%)→21年24.0点(同48.1%)と、3年連続ダウン。22年は上昇(29.4点、得点率58.8%)したが、23年(25.2点、同50.3%)→24年(24.6点、同49.1%)と2年連続ダウン。25年(31.5点、同62.9%)は3年ぶりの上昇である。

●英語:「筆記」&「リスニング」の得点率の推移



●英語の平均点・受験者数の推移



注 ① 折れ線グラフは、平成2年~17年における「筆記」(200点満点を100点満点に換算)の平均点、18年以降における「筆記」(200点満点)+「リスニング」(50点満点)の平均点(250点満点を100点満点に圧縮換算)を表示。 ② 棒グラフは、「筆記」の受験者数を表示。

■国語；“過去最低”の平均点。得点率は辛うじて“5割維持”！

◎ 英語に次いで受験者の多い国語(25年受験者約51万6,000人)について、前回の旧課程入試の始まった9年から25年までの平均点と受験者数の推移を下図に示した。

◎ 9年の国語Ⅰ・Ⅱ(9年～17年までの旧課程時の国語の出題は、国語Ⅰと国語Ⅰ・Ⅱの2科目。受験者数は圧倒的に国語Ⅰ<国語Ⅰ・Ⅱ)の平均点は70.1点(200点満点を100点満点に換算。以下、同)と高得点であったが、翌10年には58.0点と大幅にダウンしている。

その後は旧課程入試最終の17年まで、50点台のアップ・ダウンを繰り返してきた。15年に50.5点の最低点を記録した後、3年連続上昇し、新課程(現行課程)入試開始の18年には62.8点で9年に次ぐ高得点となった。

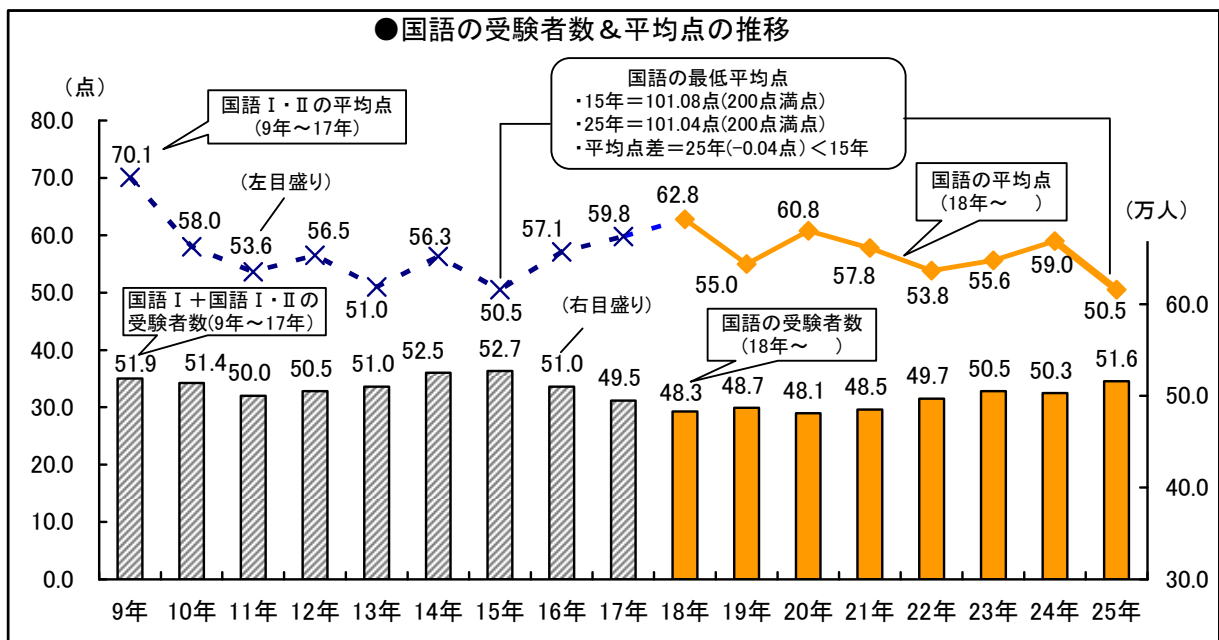
しかし、19年は大幅にダウンし、再び50点台半ばまで急落した。20年は一転して大幅にアップし、平均点は2年ぶりに60点台に戻った。

21年は再びダウンして平均点は50点台後半となり、さらに22年には、前年を3.9点下回る53.8点までダウンした。

◎ 最近では、22年の平均点をボトムとして23年55.6点→24年59.0点と、2年連続アップ。得点率も6割直前まで回復していた。

◎ 25年は第1問(現代文、評論)で受験生に馴染みの薄い難解な随筆風の評論が出題され、戸惑ったとみられる。加えて、小説や古文、漢文も難化。全体(現代文<評論、小説>、古文、漢文)の平均点(200点満点)は、24年より16.9点ダウンの101.0点で、得点率は50.5%である。

平成2(1990)年のセ試開始以降、これまでの平均点(200点満点)の最低は15年の101.08点(得点率50.5%)であったが、今回はそれを0.04点下回る101.04点(同50.5%)で、過去最低となった。



注1. 旧課程入試(9年～17年)は、国語Ⅰ及び国語Ⅰ・Ⅱの2科目出題。新課程(現行課程)入試(18年～)では、国語1科目のみの出題。

2. 200点満点を100点満点に換算。

■**数学**; 数学Ⅰ・Aは-18.8点の大幅ダウン。数学Ⅱ・Bは+4.5点で3年ぶりのアップ!

◎ 数学は国公立大志願者にとって、文系志望者も含め必須教科だ。中でも数学Ⅰ・Aと数学Ⅱ・Bは英語、国語に次いで30万人を超える受験者を擁し、文・理系型の基幹科目である。

セ試開始(2年)以降、25年までの24回に及ぶ数学Ⅰ・A(2年～8年までは旧・数学Ⅰ)と、数学Ⅱ・B(2年～8年までは旧・数学Ⅱ)との平均点の推移を下図に示した。

◎ 数学Ⅰ・A(旧・数学Ⅰ含む。以下、同)のこれまでの最低点は22年の49.0点で、セ試開始以降初めて5割を割った。最高点は12年の73.7点で、最高点と最低点との較差は24.7点。

一方、数学Ⅱ・B(旧・数学Ⅱを含む。以下、同)の最低点は10年の41.4点、最高点は6年の77.2点で、その較差は35.8点である。

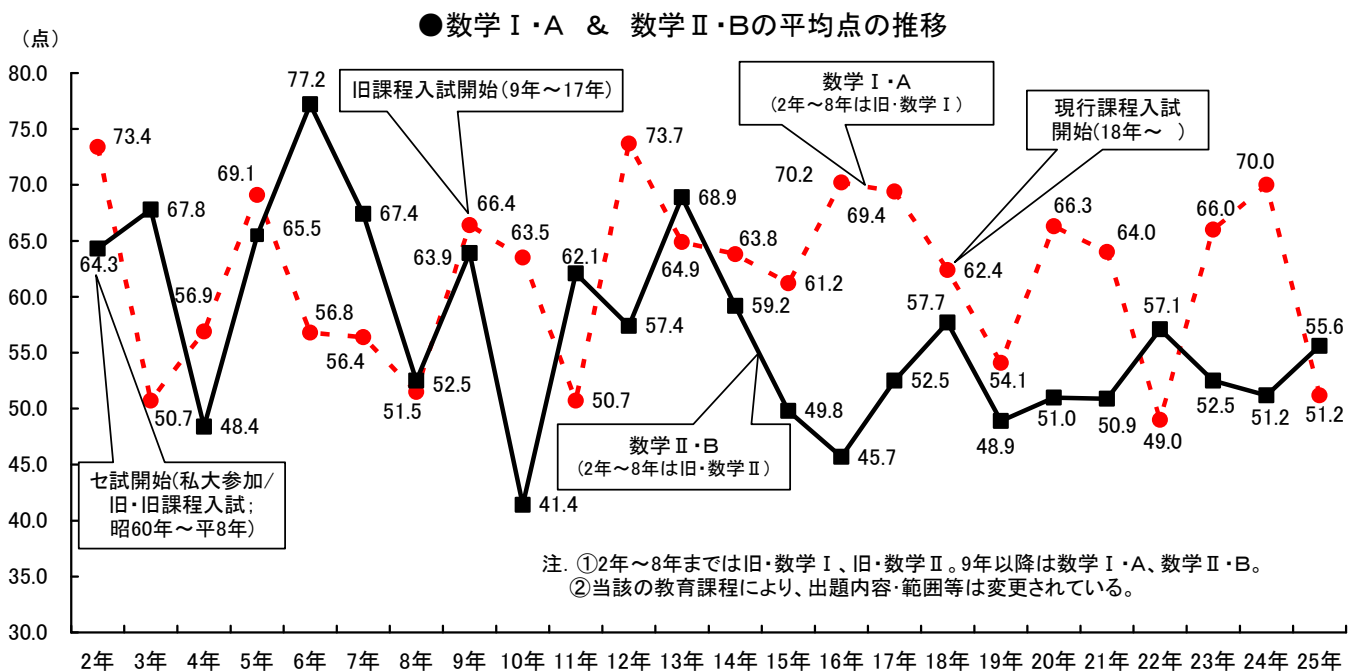
◎ 数学Ⅱ・Bの平均点は25年も含め、過去24回の試験(本試験)で50点未満が5回もあって変動幅も大きいのに対し、数学Ⅰ・Aの平均点50点未満は22年の1回のみである。

数学Ⅱ・Bは出題範囲が広く、応用問題も出題しやすいため、数学Ⅰ・Aに比べ、難易や問題量などによって不安定な平均点を示していると思われる。

◎ 最近の数学Ⅰ・Aの平均点は、22年にこれまで唯一の50点割れとなった49.0点まで急落し、13年以来9年ぶりに数学Ⅱ・Bを8.1点下回った。その後、23年66.0点→24年70.0点と2年連続上昇して数学Ⅱ・Bを上回った。25年は図形問題の難化などで18.8点の大幅ダウンとなり(得点51.2点)、数学Ⅱ・Bを再び下回った。

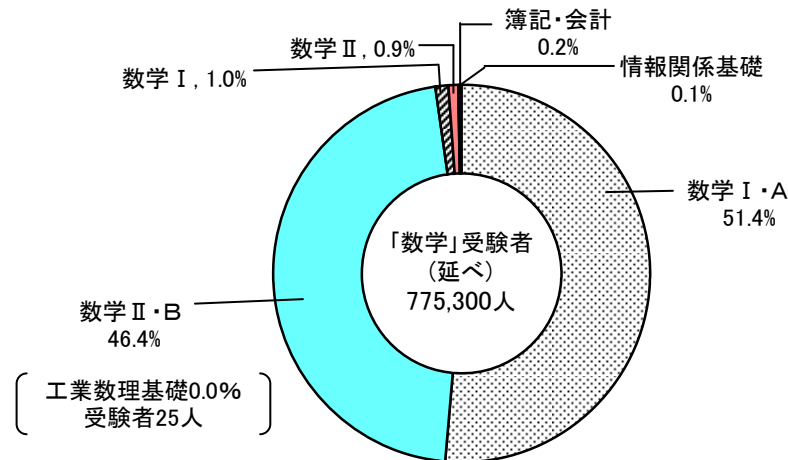
一方、数学Ⅱ・Bは、22年に57.1点で数学Ⅰ・Aを8.1点上回ったものの、23年52.5点→24年51.2点と2年連続ダウンした。25年は4.5点アップの55.6点と3年ぶりに上昇し、数学Ⅰ・Aを上回った。

その結果、数学Ⅰ・Aと数学Ⅱ・Bの平均点差は、24年18.8点差(数学Ⅰ・A>数学Ⅱ・B)→25年4.4点差(数学Ⅰ・A<数学Ⅱ・B)と縮小し、高得点科目も入れ替わった。

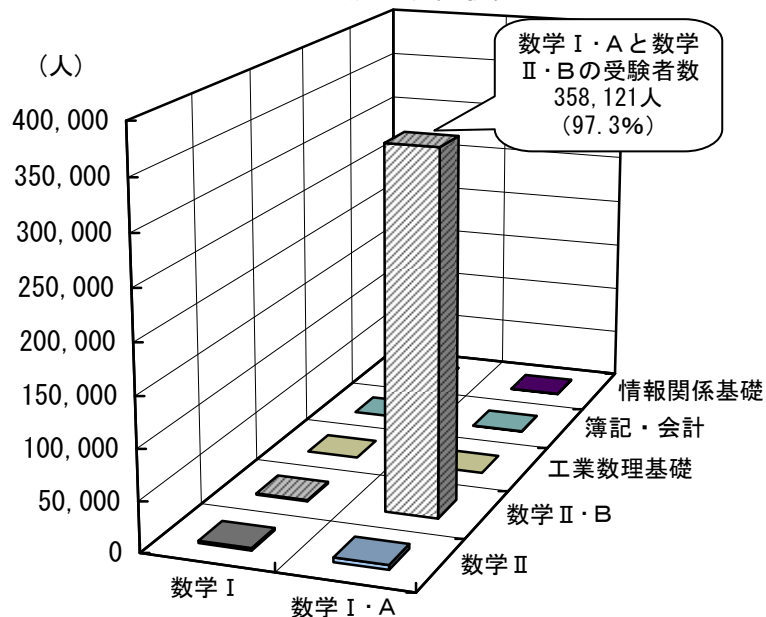


□数学2科目受験は、「数学Ⅰ・A + 数学Ⅱ・B」で約35万8,000人(2科目受験者の97.3%)

●「数学」延べ受験者の構成比（追・再試験含む）



●数学2科目受験者の内訳（追・再試験含む）



●「数学」2科目受験者：367,929人の内訳

数 学	数 学 ②				
	数学Ⅱ (人)	数学Ⅱ・B (人)	工業数理基礎 (人)	簿記・会計 (人)	情報関係基礎 (人)
① 数学Ⅰ	2,326 (0.6%)	1,509 (0.4%)	9 (0.0%)	265 (0.1%)	77 (0.0%)
① 数学Ⅰ・A	4,620 (1.3%)	358,121 (97.3%)	16 (0.0%)	510 (0.1%)	476 (0.1%)

注. ()内は、「数学」2科目受験者に占める割合。

■ **地歴・公民**：「試験枠」統合等で、「公民」受験“減少”、「地歴」受験に“シフト”鮮明！
対「23年受験者数」(統合前)：「公民」32.1%“減”、「地歴」4.1%“増”！

□ **地歴と公民の受験者動向等**

◎ **試験枠の統合**

24年セ試から地歴と公民の試験枠が統合され、さらに公民に4単位科目の「倫理、政治・経済」(以下、倫政経)が新設された。これにより、[地歴、公民]([])は試験枠を示す。以下、同)の10科目から最大2科目の選択が可能となった。

ただし、日本史Aと日本史Bなど、同一名称を含む科目同士の組合せ、選択はできない。

◎ **地歴の受験者約9,000人(2.4%)増、公民は約2万2,000人(9.0%)減！**

地歴の実受験者数(追・再試験含む)は、24年より8,872人(前年比2.4%)増の38万2,223人だった。全受験者数(54万3,271人)に占める「教科選択率」は24年より0.5ポイント低下の70.4%である。

他方、公民の受験者数は、理系志望者による“公民保険”(後述)のさらなる減少などから、24年より2万1,698人(同9.0%)減の22万665人だった。全受験者数に占める「教科選択率」も24年の46.0%から40.6%に低下した。

地歴と公民の延べ受験者数は、24年より1万2,869人(前年比2.0%)減の62万4,319人。

◎ **現代社会の受験者20.9%減の約8万3,000人、地理Bは8.1%増の約14万3,000人**

公民の受験者大幅減の要因としては、現代社会の減少がある。

現代社会の受験者数(本試験)は24年より2万2,099人(前年比20.9%)の大幅減で、ついに10万人を割り、8万3,471人である。現代社会はこれまで理系志望者の“公民保険”の代表格であった。しかし、国立大を中心にした「第1解答科目」(後述)の成績利用によって、より広範な出願が可能な地歴の地理Bなどを“本命”科目(第1解答科目)とする理系志望者が増加しているとみられる。こうした動きが、公民や現代社会の大幅減、地理Bの増加(本試験：24年より1万705人、8.1%増の14万3,233人)につながったとみる。

◎ **「公民」受験“激減”、「地歴」受験にシフト**

地歴と公民の「試験枠」統合と「第1解答科目」利用は、地歴と公民の受験者動向に上述のような変化をもたらしている。

因みに、「試験枠」統合前の23年と統合後2年目の25年の地歴と公民の実受験者数(追・再試験含む)を比べると、地歴の1万4,930人(23年比4.1%)“増”に対し、公民は10万4,392人(同32.1%)の“激減”である。公民の減少と、地歴への“受験シフト”が鮮明だ。

◎ **平均点は現代社会、世界史Bなど除き、軒並みダウン**

地歴と公民の主な科目の平均点は、現代社会+8.4点(得点60.5点)、世界史+1.5点(同62.4点)などを除き、軒並みダウンした。

特に倫理-10.2点(同58.8点)、倫政経-6.5点(同60.7点)は大幅なダウンである。

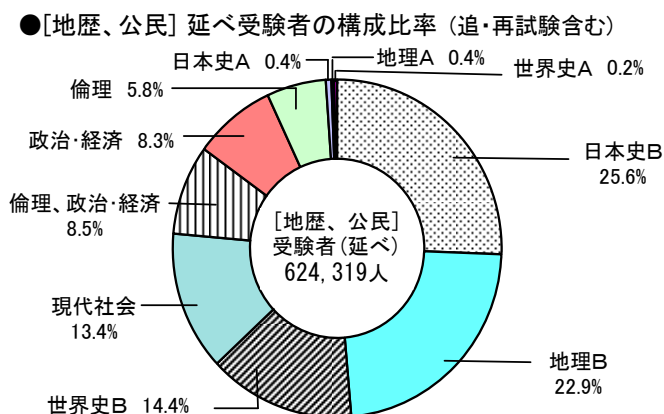
◎ **「第1解答科目」と「第2解答科目」**

24年セ試から従来の地歴、公民、及び理科3グループの試験枠を[地歴、公民]と[理科]にそれぞれ改変して各試験枠から最大2科目の選択・受験を可能とした。

志望大学のセ試利用が「1科目利用指定」である場合、当該受験生は「本命1科目」に絞って「2科目選択・受験」(2科目試験枠)を「事前登録」(24年から導入)し、「本命1科目」の解答に最大2倍近い解答時間(120分程)を掛けることが可能である。つまり、2科目受験の場合の解答科目の順番は受験者に任されることから、2科目受験者は「第1解答科目」の解答時間(60分)を、「第2解答科目」(本命科目)の解答に充てることもできる。

なお、「事前登録」した受験教科名・科目数については、25年から出願後一定期間内での変更が可能となり、約4,500件の登録内容の訂正があった。

いずれにしろ、解答時間の“不公平”を是正する観点から、全ての国立大と6割以上の公立大、及び一部のセ試利用私立大では、“2科目試験枠”における受験者が“1科目利用指定”の学部等に出願した場合、「高得点科目」による合否判定ではなく、「第1解答科目」の成績を合否判定に用いる。



□ [地歴、公民]“2科目受験”の状況

◎ 地歴と公民の2科目の実受験者数(追・再試験含む)は、24年より2万2,400人(前年比12.5%)減の15万6,817人である。2科目受験者の減少は、「第1解答科目」利用の拡大で、“公民保険”離れが一層進み、“本命1科目”受験が増えたことなどによるとみられる。

試験枠[地歴、公民]の10科目(地歴A=3科目、地歴B=3科目、公民=4科目)から2科目を選択・受験する組合せは、全部で40通り(同一名称を含む組合せを除く)になる。

この40通りを地歴と公民の2教科の組合せで大別すると、次の3パターンになる。

(1) 「地歴」1科目 + 「公民」1科目受験：約13万5,000人、86.3%

「地歴」1科目と「公民」1科目の組合せによる2科目受験者(実受験者。以下、同)は、24年より2万2,270人(前年比14.1%)減の13万5,342人([地歴、公民]2科目受験者に対する割合86.3%)で、2科目受験者の9割近くを占める。このタイプの組合せは、24通りになる。このうち、「地歴B」と「公民」の受験が13万2,871人(同84.7%)で、圧倒的に多い。

科目別の組合せでは、日本史Bと現代社会の組合せが2万5,759人(同16.4%)、日本史Bと倫政経の組合せが1万6,893人(同10.8%)、地理Bと現代社会の組合せが1万5,768人(同10.1%)などとなっている。公民における現代社会を基軸とする科目の組合せが一部崩れ、代わって倫政経との組合せが増えている。

①「地歴B科目」×「公民」受験：132,871人(84.7%)の内訳

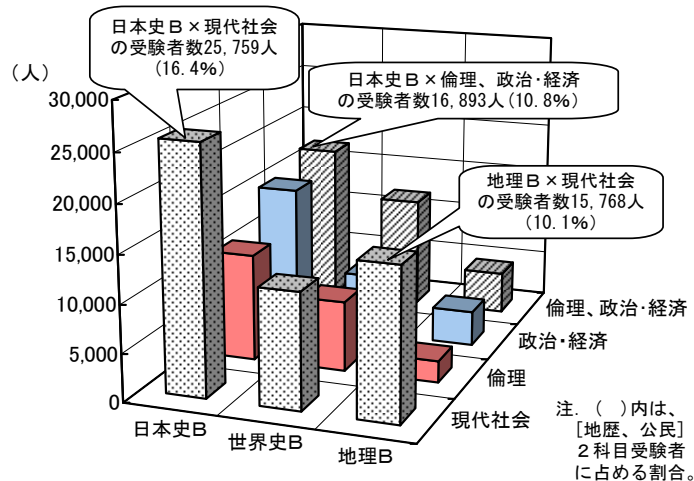
地歴		公民			
		現代社会 (人)	倫理 (人)	政治・経済 (人)	倫理、 政治・経済(人)
地	日本史B	25,759 (16.4%)	11,219 (7.2%)	15,191 (9.7%)	16,893 (10.8%)
	世界史B	12,054 (7.7%)	7,326 (4.7%)	6,481 (4.1%)	11,815 (7.5%)
歴	地理B	15,768 (10.1%)	2,265 (1.4%)	3,653 (2.3%)	4,447 (2.8%)

②「地歴A科目」×「公民」受験：2,471人(1.6%)の内訳

地歴		公民			
		現代社会 (人)	倫理 (人)	政治・経済 (人)	倫理、 政治・経済(人)
地	日本史A	570 (0.4%)	152 (0.1%)	323 (0.2%)	39 (0.0%)
	世界史A	268 (0.2%)	140 (0.1%)	123 (0.1%)	25 (0.0%)
歴	地理A	570 (0.4%)	90 (0.1%)	152 (0.1%)	19 (0.0%)

注：()内は、[地歴、公民]2科目受験者に占める割合。

● 「地歴B」 × 「公民」 受験者の内訳 (追・再試験含む)



(2) 「地歴」 2科目受験 : 約 1万7,000人、11.0%

地歴と公民の「試験枠」統合の要因にもなった「地歴」2科目受験については、受験者が24年より1,471人(前年比9.3%)増の1万7,220人([地歴、公民]2科目受験者に対する割合11.0%)である。

受験者数の増加とともに、地歴と公民2科目受験者に対する割合も24年より2.2ポイント上昇して1割を超えた。特に「地歴B」科目同士の2科目受験者は、24年より1,540人(前年比10.1%)増の1万6,791人([地歴、公民]2科目受験者に対する割合10.7%)に増えた。

「地歴」2科目受験による科目の組合せは、12通りになる。

科目別の組合せでは、日本史Bと世界史Bの組合せが7,166人([地歴、公民]2科目受験者に対する割合4.6%)、世界史Bと地理Bの組合せが6,665人(同4.3%)のほか、日本史Bと地理Bの組合せが2,960人(同1.9%)となっている。

① 「地歴B科目」 × 「地歴B科目」 受験 : 16,791人(10.7%)の内訳

地	地 歴	
	世界史B (人)	地理B (人)
日本史B	7,166 (4.6%)	2,960 (1.9%)
世界史B	—	6,665 (4.3%)

注. ()内は、[地歴、公民] 2科目受験者に占める割合。

② 「地歴A科目」 × 「地歴A科目」 受験 : 171人(0.1%)の内訳

地	地 歴	
	世界史A (人)	地理A (人)
日本史A	76 (0.0%)	34 (0.0%)
世界史A	—	61 (0.0%)

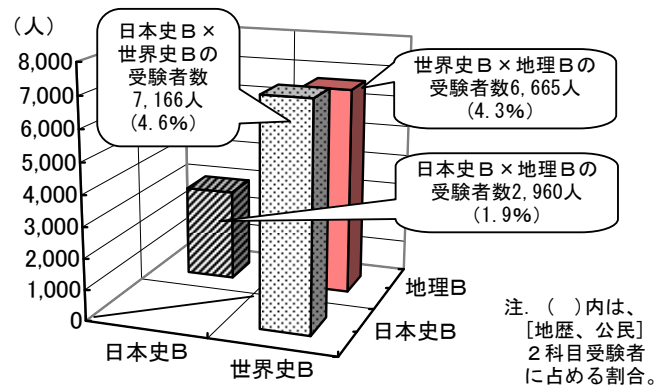
注. ()内は、[地歴、公民] 2科目受験者に占める割合。

③ 「地歴A・B科目」 × 「地歴A・B科目」 受験 : 258人(0.2%)の内訳

地 歴	A・B科目	受験者(人)
日本史	A科目 × 世界史B	51 (0.0%)
	B科目 × 世界史A	66 (0.0%)
世界史	A科目 × 地理B	33 (0.0%)
	B科目 × 地理A	43 (0.0%)
地理	A科目 × 日本史B	48 (0.0%)
	B科目 × 日本史A	17 (0.0%)

注. ()内は、[地歴、公民] 2科目受験者に占める割合。

● 「地歴B」 2科目受験者の内訳 (追・再試験含む)



(3) 「公民」 2 科目受験：約 4,300 人、2.7%

「公民」 同士 2 科目の組合せは 4 通りで、受験者は 24 年より 1,601 人(前年比 27.3%)減の 4,255 人([地歴、公民]2 科目受験者に対する割合 2.7%)である。

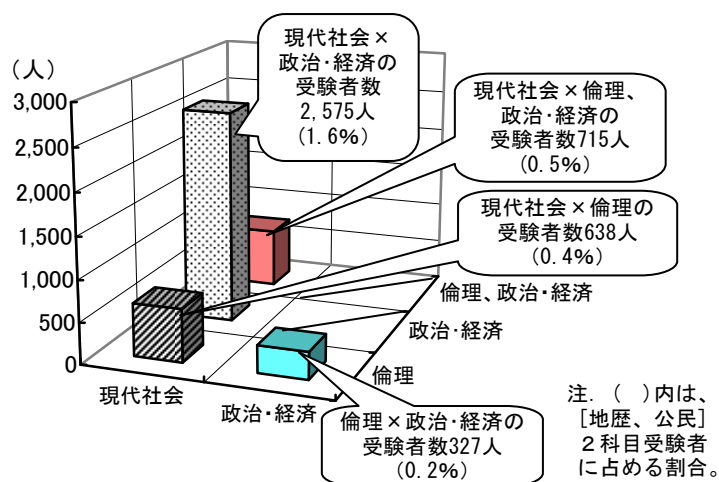
科目別の組合せでは、現代社会を基軸に、政治・経済との組合せが 2,575 人(同 1.6%)、倫政経との組合せが 715 人(同 0.5%)、倫理との組合せが 638 人(同 0.4%)などである。

● 「公民」 4 科目から 2 科目受験：4,255 人(2.7%)の内訳

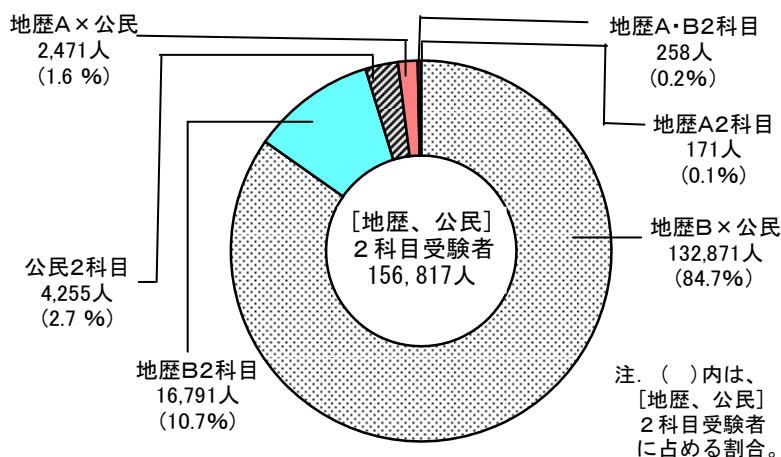
		公 民		
		倫理(人)	政治・経済(人)	倫理、政治・経済(人)
公 民	現代社会	638 (0.4%)	2,575 (1.6%)	715 (0.5%)
	政治・経済	327 (0.2%)	—	—

注. ()内は、[地歴、公民] 2 科目受験者に占める割合。

● 「公民」 2 科目受験者の内訳 (追・再試験含む)



● [地歴、公民] 2 科目受験者の内訳 (追・再試験含む)



□ 「試験枠」統合等で、地歴・公民の2科目受験“大幅減”！

◎ 国公立大のセ試「5教科6科目」（地歴・公民から1科目）時代において、地歴と公民の「試験枠」が別々であった23年までの2科目受験では、高得点を期待する“公民保険”（地歴と公民の2科目受験の場合、高得点科目を可否判定に利用→公民の高得点を期待）の傾向が強く、9年～11年までは2科目受験者（実受験者。以下、同）が“激増”した。16年は、国立大の文系を中心に地歴・公民2科目必須となったため、2科目受験者は一気に増え、約25万3,000人の過去最多を記録。地歴・公民受験者に占める2科目受験者の割合（構成率）も初めて50%を超えた。

◎ 新課程（現行課程）入試となった18年は、時間割の変更等で2科目受験者は前年より約1万1,000人（4.9%）増の約24万4,800人。地歴・公民受験者に占める割合も過去最高の55.4%。

19～21年は、理系志望者を中心に“公民保険”の意味合いが薄れ、2科目受験者の減少、構成率の低下が続いた。22年は2科目受験者増となったが、その構成率は4年連続低下した。

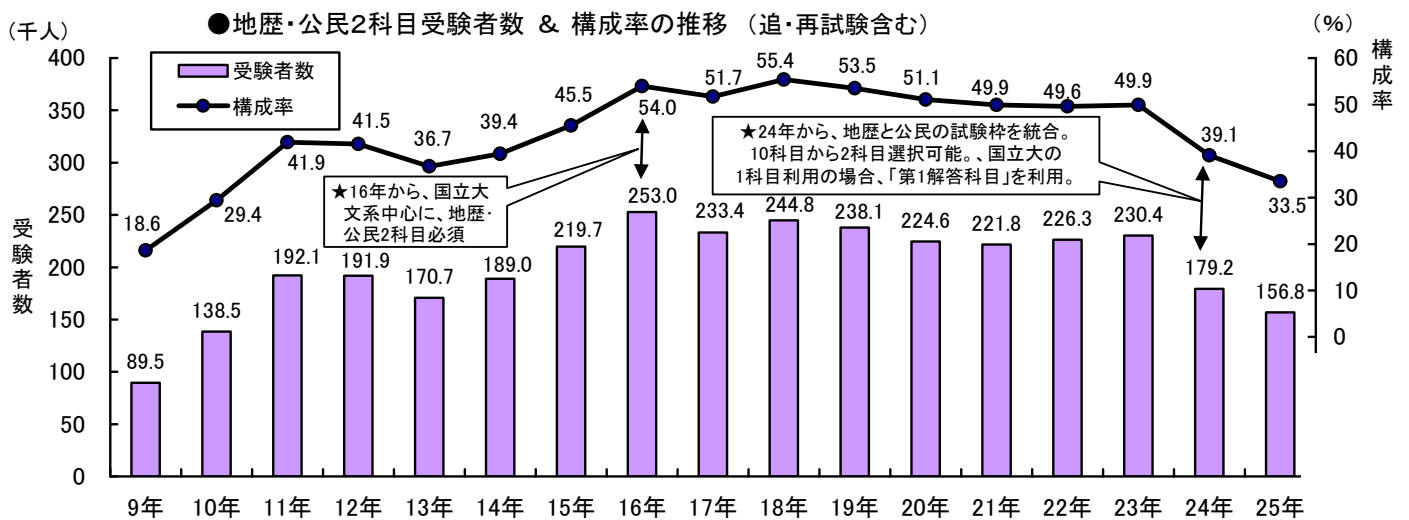
23年は2科目受験者が約4,200人（1.8%）増の約23万400人となり、2年連続の増加。また、2科目受験の構成率も49.9%で、5年ぶりのアップとなった。

◎ 24年は「試験枠」の統合、国立大を中心とした1科目指定における2科目受験の成績利用の大転換（「高得点科目」→「第1解答科目」）などから、“公民離れ”が進んだ。

その結果、統合された試験枠[地歴、公民]における2科目受験は、23年より5万1,207人（前年比22.2%）減の17万9,217人に“激減”した。また、地歴または公民の実受験者（1科目・2科目受験）に占める2科目受験者の割合（構成率）も39.1%にダウンした。

◎ 「試験枠」統合2年目の25年は、前述したように「第1解答科目」利用の拡大などで“公民離れ”が一層進み、地歴と公民の2科目受験者は24年より2万2,400人（前年比12.5%）減の15万6,817人だった。

この受験者数は、「試験枠」統合前の23年に比べ、7万3,607人（31.9%）の“大幅減”で、2科目受験の構成率も23年より16.4ポイントダウンの33.5%に低下した。



注. 「構成率」は、地歴または公民の実受験者数（1科目・2科目受験）に占める、2科目受験者数の割合。

■ **理科**; 理系志向を反映し、受験者約1万3,000人、3.5%増。平均点は全科目で低下!

◎ 選択科目の弾力化と「試験枠」の統合

理科も科目選択の弾力化を図るため、24年から3グループの試験枠を統合し、6科目から最大2科目の選択を可能にした。統合された試験枠[理科]における2科目選択の組合せは、全部で15通りになる。「第1・第2解答科目」の扱いは[地歴、公民]と同様である。

◎ 受験者の動向等

25年の[理科]全体の実受験者数(追・再試験含む)は、“理系志向”を反映して、24年より1万3,242人(前年比3.5%)増の39万5,871人で、全受験者数(54万3,271人)に対する「教科選択率」は24年より0.2ポイントアップの72.9%である。延べ受験者数は、24年より1万5,774人(前年比2.5%)増の63万5,702人である。

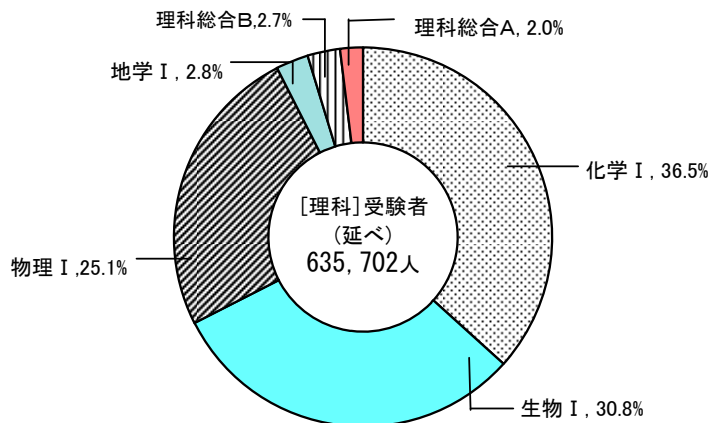
理科の各科目(本試験)の受験者の動きをみると、理系に必須の物理Iは6,791人(前年比4.4%)増の15万9,644人、化学Iは8,276人(同3.7%)増の23万1,945人、生物Iも6,601人(同3.5%)増の19万5,815人である。

これに対し、文系志望者の受験が比較的多い理科総合A(24年より2,465人、16.1%減)、理科総合B(同3,055人、15.0%減)、及び地学I(同494人、2.7%減)が減少している。

これは、高得点を期待して受験していた文系志望者が、「第1解答科目」の成績利用の拡大によって、より広範な出願要件の確保と高校での履修率(学習の度合い)が地学Iより高い生物Iや化学Iを“本命”科目(第1解答科目)としたことなどによるとみられる。

平均点は、理科総合Aの-23.2点(得点44.8点)を最大に、物理I-5.3点(同62.7点)、化学I-1.5点(同63.7点)、生物I-2.7点(同61.3点)など、全科目でダウンした。

● [理科] 延べ受験者の構成比率 (追・再試験含む)

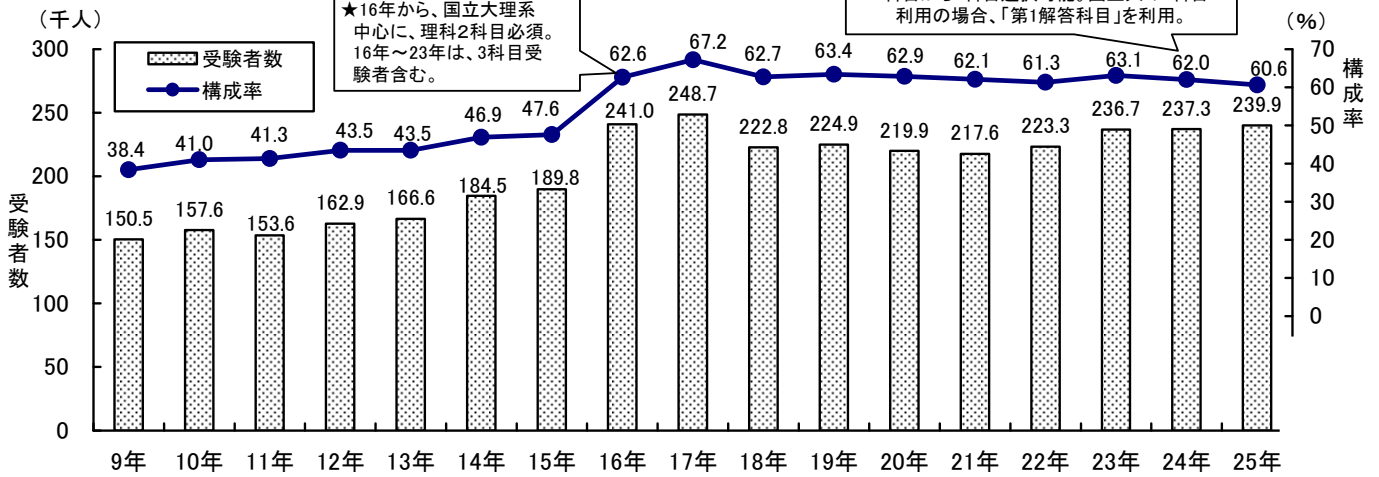


◎ [理科] “2科目受験” の状況

試験枠[理科]における2科目の実受験者数(追・再試験含む)は、24年より2,535人(前年比1.1%)増の23万9,879人で、[理科]の実受験者数(追・再試験含む)39万5,823人に対する割合(構成率)は60.6%である。

2科目受験の組合せは例年同様、物理Iと化学Iの組合せが13万9,138人(2科目受験者に対する割合58.0%)で最も多く、次いで化学Iと生物Iの組合せが7万761人(同29.5%)で、化学Iを基軸に物理Iと生物Iとの組合せが2科目受験全体の9割近くを占めている。

●理科2(3)科目受験者数 & 構成率の推移 (追・再試験含む)



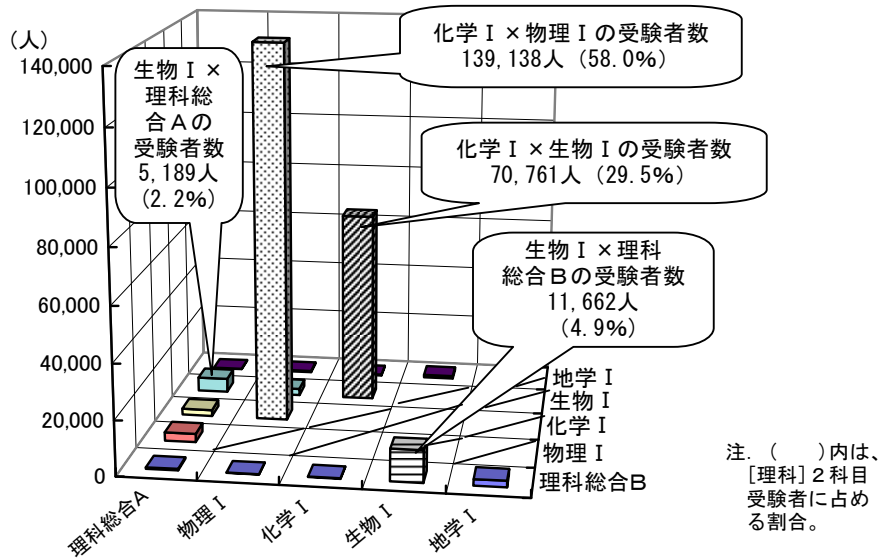
注. 「構成率」は、理科の実受験者数 (16年～23年は1科目・2科目・3科目受験者) に占める、2(3)科目受験者数の割合。

●[理科] 2科目受験者 : 239, 879人の内訳

	理 科				
	理科総合B(人)	物理I(人)	化学I(人)	生物I(人)	地学I(人)
理科総合A	542 (0.2%)	3,129 (1.3%)	2,284 (1.0%)	5,189 (2.2%)	225 (0.1%)
理科総合B	—	116 (0.0%)	212 (0.1%)	11,662 (4.9%)	2,353 (1.0%)
物理I	—	—	139,138 (58.0%)	2,429 (1.0%)	527 (0.2%)
化学I	—	—	—	70,761 (29.5%)	358 (0.1%)
生物I	—	—	—	—	954 (0.4%)

注. ()内は、[理科] 2科目受験者に占める割合。

●[理科] 2科目受験者の内訳 (追・再試験含む)



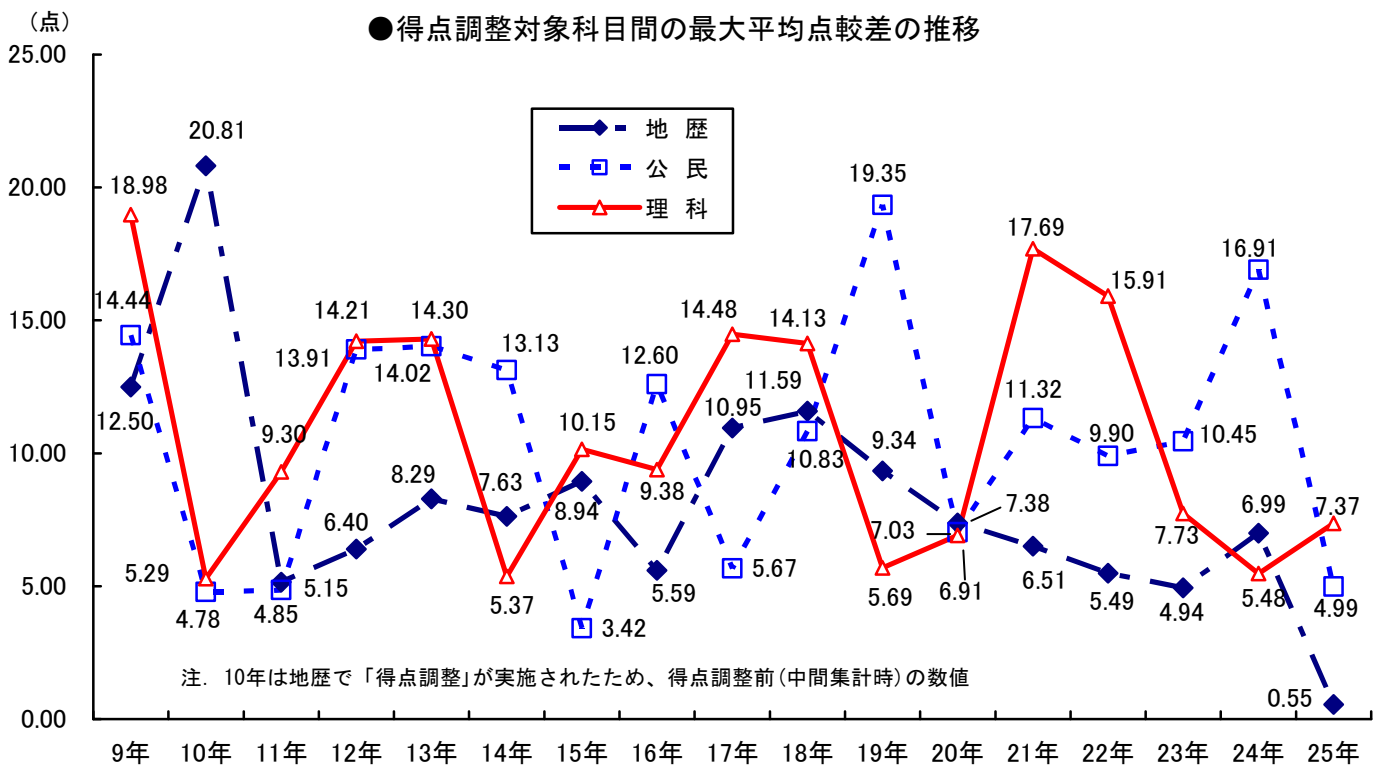
注. ()内は、[理科] 2科目受験者に占める割合。

■ **得点調整**; 対象科目間の平均点較差「地学Ⅰ－生物Ⅰ」＝7.37 点で、調整なし！

◎ セ試の選択科目間における大幅な平均点差に対しては、「得点調整」が実施される場合がある。得点調整は、「地歴のB科目間、公民(倫政経を除く)の各科目間、及び理科の各<Ⅰ科目>間で、原則として20点以上の平均点差が生じ、これが試験問題の難易差に基づくものと認められる」と、実施される。

◎ 下図は9年以降の得点調整対象科目間の最大平均点差の推移を示したものである。

25年の得点調整対象科目間の平均点差をみると、地歴；世界史B－地理B＝0.55点、公民；現代社会－政治・経済＝4.99点、理科；地学Ⅰ－生物Ⅰ＝7.37点で、最大較差の理科でもガイドラインの20点以内に収まり、得点調整は実施されなかった。



<得点調整の実施>

- これまでの得点調整実施の有無をみると、10年は地理Bと日本史Bとの平均点差(地理B > 日本史B)が20点以上(中間集計時点)となったため、世界史Bも加えた地歴3科目間で得点調整が実施された。
- グラフにはないが、共通1次時代(前々回の教育課程による旧・旧課程入試)の平成元(1989)年にも理科で実施(物理・生物の得点を修正)された経緯がある。

注) 旧課程入試(9年～17年)の得点調整対象科目は、地歴と理科のB科目間、及び公民の各科目間。

■ **受験科目数別の受験状況**; 7科目受験者 10.2%“増” / 8科目受験者 36.3%“減”!

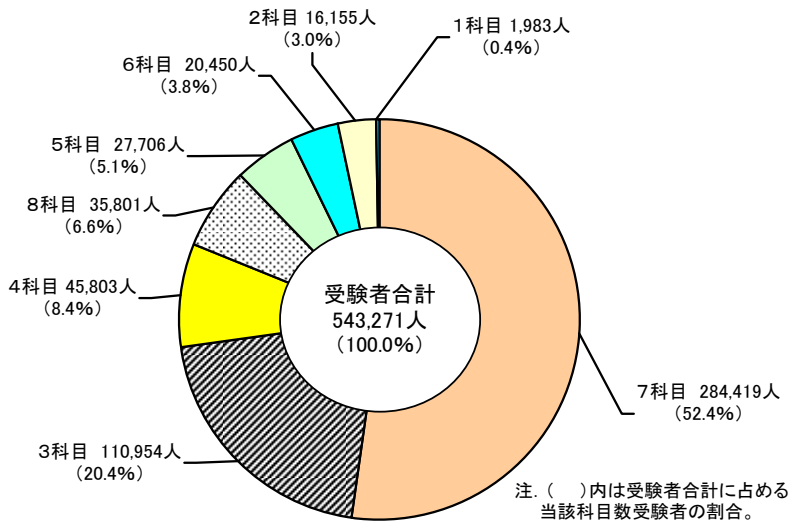
◎ セ試の受験科目数は、24年から理科の選択・受験科目数が最大3科目から2科目となったため、最大受験科目数は23年までの9科目から8科目に減っている。

◎ セ試の受験科目数別における受験状況の推移(下図)をみると、16年以降、国公立大の「5(6)教科7科目」化によって「7~9科目」受験が急増し、高い受験率(当該科目数の受験者数÷全受験者数×100)を示している。

◎ 25年は全体の受験者が1万6,960人(3.2%)増加した中、7・8科目受験者の合計は、24年より5,889人(前年比1.9%)増の32万220人だった。

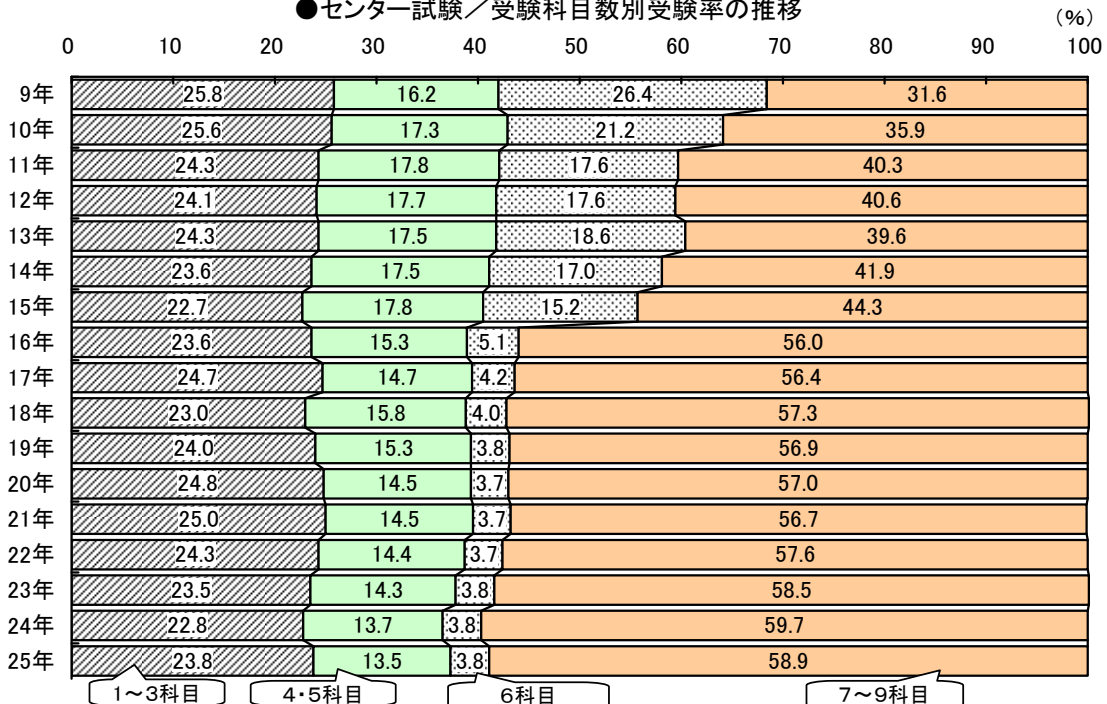
ただ、7科目受験者(全受験者の52.4%)が2万6,299人(同10.2%)増えた一方で、8科目受験者は2万410人(同36.3%)減った。

● 25年センター試験 受験科目数別受験者数



* 全体の受験率(全受験者数÷志願者数×100)は19年以降上昇傾向にあり、25年は前年を0.1ポイント上回る94.8%である。
 なお、これまでの最高は、セ試開始時(2年)の94.9%。

● センター試験 / 受験科目数別受験率の推移



注: ① 受験率は、受験者合計に占める当該科目数受験者の割合。
 ② 9科目受験可能は、16年~23年。 ③ 16年から国立大を中心に、5(6)教科7科目。